

Special  
Interview

このころ  
のくすり  
vol.2

奈良薬師寺執事

おおたに てつじょう  
大谷 徹奘 さん

# よつぽどの縁。

17歳で奈良薬師寺の故高田好胤管長に師事し、  
薬師寺の僧侶となって約30年。  
現在は、全国各地で説法を行っておられます。  
聴けば、背筋がピンと伸び、元気をいただきます。  
徹奘先生の言葉はまさに「このころのくすり」です。



「出ていけー!」という

師匠の言葉を待っていた

私の師匠・故高田好胤薬師寺管長は、仏の道では名の知れ渡ったお方であり、私にとって憧れの存在でした。テレビ出演する著名人でありながら、デパートの靴売り場などにも法話に出かけ、人々を魅了してしまう師匠を、子供ながらに「かっこいい」と思いました。そして自分もお坊さんになろうと決心し、17歳で弟子入りしたのです。でも薬師寺の修行は地味で辛く、何度「逃げよう」「やめよう」と思ったか。「師匠は大好きだけど、寺の環境は大嫌いだ」と毎日、思いながら生活をしていました。薬師寺は東京に別院があり、師匠の随行で東京へ行くようになると、夜に寺を抜け出しては飲み歩くようになりました。今の私はお酒もお肉もいただきませんが、当時はずいぶん深酒もしました。翌朝は酒の臭いがぶんぶん残るほどでした。私は逃げ出す根性がなかったので「出ていけ!」という言葉を待っていたのです。ある朝、いつにもましてひどい二日酔となり、割れるような頭痛の中で「今日こそ私を寺から追い出してくれるだろう」と思っていると、師匠は静かにこう言われました。

# どんな自分か 育てて ますか 「よつぽど」

飾らない言葉に魂が宿る「徹英語録」。



## 「よつぽどの縁」 いちばんの相手は 自分自身。

「寝とけ、徹装。しんどそうだから」。師匠はすべてお見通しだったのです。このとき師匠に憧れて僧侶の道を選んだことを思い出し、もう逃げ出そうとするのはやめよう。心を入れ替え薬師寺で生きていこう。そう決心しました。しかし本当の辛い修行はここからでした。

### 縁があったから 今こうして生きている

薬師寺の若い僧侶は「四度加行（しどけぎょう）」という厳しい修行をしなくてはなりません。小さ

な行場に閉じこもり、65日間、仏様とだけ対峙し、ひたすらお経をあげるものです。肉体的にも精神的にも非常にきついものでした。人は辛い環境に身を置かれるとマインス思考に走るそうですが、あのときの私がまさにそうでした。「なぜこんなことしなきゃいけないのか」と修行を否定し、「坊主になんかならなきゃよかった」と僧侶を否定し、「こんな寺にこなきゃよかった」と薬師寺を否定し、さらに「仏様、あなたさえいなければこんな苦しい思いをしなくてすんだ」と仏様まで否定しました。まさに

こう言いました。「世話をして給料をもらってるんだから、自分たちが食わせてやつてるも同然だ。みんなと同じように私の世話をしろ」と。こういう言葉を吐く人を愛せるでしょうか。人が近寄りたがるのは当然。おばあさんの孤立は深まっています。若いころから怒りっぽい人はどうか注意してください。次に「いばるな」。老人ホームの入園者の中には「自分は特別だ。人とは違うのだ」とプライドを振り

かざす方がいますが、それは「いばり」につながり、やはり人は近寄りたがってきません。そして3つめが「笑顔でありがとう」。人はつい周りへの感謝を置き去りにしてしまいがちです。「女房だから家を守って当たり前」「社員だから働いて当たり前」「社長なら責任をとるのは当然」と。しかし、本当はすべてはおかげなのです。感謝なのです。家族のおかげ、会社のおかげ、社員のおかげ、社長のおかげ……。そして、その感謝の心を笑顔と「ありがとう」の言葉で伝えられるか否かで、幸せを引き寄せられるかが決まります。人は決して二人では生きることが



徹英先生の法話には、老若男女さまざまな人が集まり、熱心に耳を傾ける。

否定のドミノ倒しです。そして最後にととうとう、人間としてやっていけない自分の命の否定をしました。「生まれてこなければよかった」と。あまりに苦しい修行で、極限状態まで追いつめられながらお経本を読み上げていたとき、突然、ある3文字が明るく照らし出されたように浮き上がって見えしました。「歎宿縁(かんしゆくえん)」。これは宿っている縁を歎びなさい、という意味です。私ははつとしました。ああそうか、縁があったから、今こうして行場にいるのだ。縁があったから薬師寺に入れたのだ。縁があったから、今こうして生きているのだと。そう思ったとたん、倒れたドミノが次々と立ち上つてきました。すべては「よつぽどの縁」。そして「よつぽどの縁」のいちばんの相手は自分。私という存在に出会うたことを歎べてこそ、人との出会いも歎べるのだと気づかされました。

### 今すぐできる 「幸せの3か条」

私は全国各地のいろいろな場所でお話をさせていただいています。企業、学校、刑務所、老人ホーム、幼稚園……。どこでも、誰に対しても、伝

えたい話の基本は同じです。そのひとつが「幸せの3か条」です。人にとつて幸せの根本は「人と仲よく生きていける」こと。家庭、会社、学校、どこでも人間関係に恵まれれば、人生はほほううまくいくものです。私がいつもお話しする「幸せの3か条」とは「怒るな、いばるな、笑顔でありがとう」の3つです。まず「怒るな」。ある老人ホームを訪問したとき、いつも腹を立て文句を言っている90歳のおばあさんがいました。入園者は誰も近づかず、職員さえ必要などき以外そばに行きません。おばあさんは自分が嫌われていること自体に腹を立て、職員たちに

できません。でも、いつの間にか私たちは、自分を特別だと思いついてしまいがちで、自分を支えてくれているものを見忘れたり、見下したりしています。それでは幸せはつかめません。心を静かにして「生きる自分」と同時に「生かされている自分」であることを見つめ直し、感謝とともに生きていきたいと私は思っています。



幼稚園児を相手に、わかりやすい言葉で説法を行なう。



僧侶としての出発点である奈良薬師寺。

P15で「静思のスメ」好評連載中!

大谷 徹英さん  
TETSUJO OTANI

1963年東京生まれ。17歳で薬師寺の故高田好胤管長に師事、薬師寺の僧侶となる。龍谷大学文学部仏教学科卒業後、同大学院修士課程修了。現在、薬師寺執事 兼 薬師寺東閣東別院・潮音寺副住職。著書に「自分で選んだ道なのに」「こころの業」「愛情説法」走る!」など。本誌「静思のスメ」好評連載中。

※四度加行(しどけぎょう)／内容が四段階に分かれている密教の修行

トピラ・P3右下写真／坂井 信彦